



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<研究活動報告>ポルタル教授講演要旨
Author(s)	ポルタル, ロジェ; Portal, R.
Citation	スラヴ研究, 15, 165-169
Issue Date	1971
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/5011
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000112935.pdf



《研究活動報告》

ポルタル教授の講演要旨

はじめに

1970年5月25日、パリ大学スラブ研究所長ロジェ・ポルタル教授がフランス政府の文化使節として北大スラブ研究施設を訪れた。同教授は5月29日まで滞在されて二回の講演を行ったが、以下はその要旨である。

周知のように、ポルタル教授は近代ロシアの経済史を専攻され、その手がたい業績は、フランス本国はもとよりソ連や欧米各国においても高く評価されているが、わが国では山本俊朗氏の紹介（「フランスにおけるスラブ研究の新しい成果——ポルタル教授の近業を中心として——」『社会経済史学』 Vol. 32, No. 4, 1966, 105—108 ページ）があるくらいで、この際同教授の快諾を得て本誌に掲載することにした。

講演 I. 18世紀末より20世紀はじめのロシア社会

1917年の革命によってロシア社会が全面的に変貌し、革命前と革命後の二つの社会のあいだにきわだったコントラストを生んだことから、ともすれば人は革命前のロシア社会の中にある変化の諸要素を低く評価し、それがながきにわたって硬直した制度であり、あまり順応性のない構造であって、1905年の諸事件や代議制的立法議会の創設にもかかわらず、ほとんど変ることのなかった政治体制を恒常的に維持してきたと考えがちである。

しかしながらロシア社会は1860年ごろまでに前資本主義的な、そして1890年代からは加加速度的な工業化に応じて発展した資本主義的な諸形態を持つところの経済的発達の影響を受けて、この一世紀半のあいだにいちじるしい発展を見たのであった。

まず初めに気づくことは、農奴制に立脚した古い社会構造が頑強に存在し、それが19世紀も末になって（1861年の解放令後二・三十年たって）ようやく消えてゆくということである。経済的発達と自由の発達の過程が、何世紀にもわたって同時に進行した西ヨーロッパとは異なり、ロシアにおいては、工業化が農奴制的なものの考え方を保持する社会に影響を与えて、その社会的諸結果を発展させるようになったのは、わずか半世紀そこそこのことであつた。

また西ヨーロッパにおいては社会的解放の時代だった18世紀が、ロシアにおいては反対に、社会の諸カテゴリーを固定化せんとする時代だったということも目につくだろう。それ故経済的発達に伴う発展的要素が、ツァーリズムによって時代錯誤的に維持されてきた法的構造とはげしくぶつかることになり、しかもこの衝突は第一次世界大戦に至るまで続いたのであった。

このような社会的背景をもとに、われわれは経済的諸条件——それらはたしかに大したものではないが、とって一見考えられるほど小さなものでもない——と同時に、異常に

拘束的な法的・政治的諸条件とを考慮する必要がある。このような法的・政治的条件が、また逆に農奴制に立脚する社会構造として精神状態^{マンダリタイ}の上に作用を及ぼしたからである。法律以外にも、19世紀のロシアにおいては貴族の商人に対する蔑視や、商人の権力を分担することの恐れ（単に地方自治のレベルにおいてすら）が、西ヨーロッパの「勝ち誇れる」ブルジョワジーの力の自覚ときわだった対照をなして、ロシアのブルジョワジーをして政治的に取るに足らぬ存在へと追いやったのであった。

経済的発達の社会的諸結果がかなり明瞭とはいえ、精神状態^{マンダリタイ}の研究は未だ残されたままである。しかし社会的カテゴリーをもっとはっきり定義し、それら相互間の関係を明らかにしてお互いの他に対する考え方を理解するためにもこの研究は不可欠であろう。

*
* * *

ロシア社会は本質的に農民社会である。たとえ都市住民や非農家の割合がふえたとはいえ——それは1880年以後とくにいちじるしかった——ロシア社会はこの一世紀半のあいだ農民社会であり続けた。都市の住民のかかなりの部分、とくに19世紀のあいだに経済的発達が生み出したところの新しいカテゴリーである労働者は、田舎と密接なきずなを保っていた。20世紀に入る時期においてすら、形成期の労働者階級は農民的な考え方^{マンダリタイ}を持ち続けていたのである。

農民層は均質的なものではない。1861年までは、法的区分（自由な国有地農民、農奴、^{オプコルニク}年貢農奴、家内農奴、工場農奴、そして1808年までの工場「登録」農民）と、実際に生じた区分が抵触していた。とくに金のもうかる職業を営む自由農民や農奴（この場合は自分の自由を買戻したあとのことだが）は、商人のカテゴリーに近づいていった。経済的発達の緩慢さはこのような社会的上昇を制限したが、それでも1820年以後はかなりの人数にこのような上昇を許容したのである。逆説的にも織物工業のブルジョワジーは農奴身分から生まれたのであった。

1861年以後農民は法的に自由になった。しかし社会的分化は、農村共同体という障害や貴族の大土地所有の存在や経済的発達の速度の不十分なリズムが障害となって、限られたものだった。1905年以降になって、農村共同体に敵対的な政府の政策がこの障害を一掃した。そして革命の前夜になって、農村ブルジョワジーが形成されるようになってきたのである。

このような農民大衆に対して、古い家柄の土地貴族層は、しだいに官僚貴族に呑みこまれていった。1917年に至るまでロシア国家は貴族的、官僚的国家にとどまった。貴族と農民とのあいだで土地の分割が取りきめられた1861年以後においてさえも、貴族層は大部分の土地を保持しており、全体としては、その経済的基盤を土地においていたのである。

しかし問題は、彼らが一つの階級として困難な立場になってきたということにある。威信を保つための出費はかさみ、彼らの存在を保証するための土地からの収入は、しだいに不十分なものとなっていった。ここにおいて、より一般的な問題が出てくる。即ち、政治権力において強力であり、国家の中枢を為していた貴族が、その物質的基盤が掘り崩されるのを感じずようになり、没落していったのか、ということである。実をいえば、ロシアの貴族は産業の進展に参加したのであった。彼らは輸送機関の発達に力を貸し、後退した

《研究活動報告》

りすることがなかった。貴族階級内部では分化が生じ、富裕な家族がより豊かになり強固になると同時に、多くの家庭を貧しいものにした。1861年以後の貴族による土地の売却は、彼らの貧困化のしるしであるが、それとても必ずしも貴族の工業、商業、銀行業の分野における以前よりもきわだって有利な活動をうち消すことにはならなかった。これらの貴族は高水準の経済力を保持していたのである。政治的な力はロシアの貴族が「産業革命」の恩恵に浴することを許容したが、この産業革命はおだやかな形であったとはいえ、20世紀初頭のロシアを震撼させたのであった。

最後に、19世紀における経済的発達、18世紀にも19世紀のはじめの四分の三にも存在しなかったところの労働者階級の形成と、18世紀には純粹に商業的特徴を持っていたのが、19世紀になると工業や銀行業（この場合は1860年以後銀行が設立されるようになってはじめて現われる）の分野に進出してくる「ブルジョワ」階級の発達（形成とはいえないまでも）とをうながした。ロシアの社会的発展のもっとも独自の特徴は、たしかに、きわめて速かに豊かになった、権力に服従的で忠実な産業ブルジョワジーの形成のうちにある。もっぱら経済的活動に没頭していた彼らが、国家的役割を果すようになったのはようやく20世紀のはじめからであった。もう一つの独自の特徴は、「商人」階級（この中には工業家も含まれる）が「ギルド」として階層的な組織の中に統合されており、これら「商人」の最大のねがいは貴族になることであって、その私的情況は貴族のそれに近づいていったということである。彼らが貴族に叙任されることによって、ブルジョワジーのもっとも経済的にダイナミックな要素が貴族に併呑されることになり、かくてブルジョワジーは上からすくい取られて社会的に弱い位置にとどまったのである。

労働者に関しては、たしかに1914年になってもその数は少なかったが、いくつかの都会や工業地域に集中していたことがあげられる。彼らはたしかに一つの明確な社会的階級を構成し、19世紀の末には出身の村と完全に離れるようになってきたが、法的見地からは、依然として農民であり続けた。ロシア社会の「身分」上の区分は1767年のエカテリーナ2世によって招集された有名な委員会以来ほとんど変わることがなかった。1905年以後出来た代議制度が機能することによって、この制度を一変させることができたかも知れないが、第一国会においてすら投票や選挙の条件は、労働者を全政治的存在の枠外に残したままであった。

*

* * *

1917年の革命前夜のロシア社会は、その独特な特徴を保持しながらも、西ヨーロッパ社会に近づく方向をめざして発展していた。経済的発達は古い法的枠組を掘り崩し、それを破壊せんばかりになっていた。新しい、より開かれた社会ができつつあった。しかしこの発展的現象は質的というよりも量的性格のものであった。社会の流動性、「毛細管現象」は取るに足らぬものだった。新たな経済的諸条件と結びついて発達したブルジョワジーとプロレタリアートのそれぞれの状況は、この発展に比して時代錯誤的であり続けた体制に対するレジスタンスを証言していた。この両者の争いがその反動としての革命の暴力性とその決定的な性格とを説明するものなのである。

（外川 継男 訳）

講 演 II. 19～20世紀のロシアにおける工業中産階級

ロシアの中産階級の研究は、ほとんど行われていない。この仕事は二つの点で興味あるものである。一つは、たしかに、数は少ないけれども、経済的に、また、社会的に重要な役割をした社会的範疇について述べる機会を与えるからである。今一つは、ロシアの経済的に立ちおくれた、また、農奴制によって相対的に動きのとれない社会の中から生まれてきた社会的階級の数少ない、貴重な事例を示すからである。その点で最も典型的な例は、工業中産階級である。

ロシアの中産階級の一つが農民の中から出てきたのは、早くも16世紀の商業部門に於てである。工業部門では、18世紀以後、とくに19世紀の初頭に於てである。また、金融部門で生まれたのは、19世紀の末であった。それは、新しい中産階級で、第三の商業組合に登録されたものを調べ得る限りのものであり、数の上では問題にならないくらいのものである。マニユファクチュアのほとんど全部は、第一および第二の組合に属していた。かれらは一般に、商業階級の「エリート」を成していた（1864年に6500万人の住民中第一組合2017人、第二組合5403人であった）。

ロシアの工業中産階級は、繊維、とくに綿工業を経営していて、大部分がモスクワの間であった（鉄工場は貴族のものであり、また、ペテルブルグの工業はロシア化した外国人の手中にあった）。かれらの大部分は農奴の出であった。かれらが金をつくり、自由となり（1820年代）、都市社会への道を拓いてから、1917年消滅するまでに、1世紀もたっていない。1914年に存在していたほとんど全部の繊維マニユファクチュアは、農奴の時代にはじめられたものである。1861年以後のものは、あまり多くない。発展したのは古くからのマニユファクチュアである。

農奴制の中で金をつくったのは、とくにイワノヴォのシチェレメンテフ家の領内、一般にいてモスクワから東の方に延びた地域で、早くも19世紀の初頭に於て、同時に何等かの仕事に雇われていた農奴職人である。そこでかれらの所有者たちは、かれらがいくらかの土地（農奴が住み得るところ）を購入したり、家で手仕事をするを許した。1822年に制定された保護関税を利用して、かれらは、織物、捺染マニユファクチュアを発展させた。イワノヴォのガレリン家、ガンドウリン家、クバーエフ家、キネシマのコノヴァーロフ家、ヴィチガのクラシーリシチコフ家、ジュヴォニコリスコエ、ドヴェーリのモロゾフ家がそれである。

しかしながら、これらの綿マニユファクチュアのうちのものは、もともと自由農民（国有地）であり、まれには、「^ゴ「^サ工業地区^ー」の住民」であった。モスクワのプロハーロフ家、アレクサンドロフのバクノフ家、ラメンスコエのマリューチン家がそれである。

1840年代に、既存の織物、捺染マニユファクチュアと結びついた紡績工場を発展させたことによって、工業中産階級は可成りの額の金をつくったし、農奴制が撤廃された時点で、かれらはきわめて強固な経済的位置を得たが、それが、1914年まで続いたのである（同じ名前や、同じ姓を見出すことができる）。

《研究活動報告》

約半世紀の間、地方自治の機能が、これらの依然としてまだ農民的な性格をもち、厳格な生活を送って、常に仕事に没頭してきた中産階級に、とくに何等かの影響を与えるという事はなかった。一方、かれらの多くは分離派教徒で、政府の嫌疑をうけたり、時として迫害された（1855—1860）が、かれらは常に、ツアーリの用人の間でさえ、自分たちへの支持を得ていた。

農奴制撤廃の後、中産階級の人々は、まったく別の方法で浮び上る。自由農民に生まれて工業に従事した人々は、いよいよ公事に深入りしたが、かれらが自治体活動をやったのは、1905年までであった。かれらは旅行をして廻り、外国語を習い、大学で学んでいる。しかし、工業中産階級（繊維マニュファクチュア）の人数は、急速に増大した。1840年代に急速な経済的発展が行われるが、もはや個人的にチャンスをとらえることはできなかった。現存するマニュファクチュアは、近代化して比重を増していたのである。田舎のマニュファクチュアで働く職人たちは、1870～1880年の間に姿を見せなくなった。マニュファクチュアは、動力織機や精紡機（機械化がはじまったのは、イギリスから自由を買って紡績工場をつくることのできるようになったときである）を使って、各種の工程を集中化した。商業によって富裕化したその他のマニュファクチュアの少数は、何不自由なく定着するために十分な資力をもっていた（リャビシンスキー家の場合）。しかしその時、中産階級は、貴族に列せられることによって大きく変った。かれらが、「名誉市民」の称号を与えられたとき、第一組合の多くのマニュファクチュアは、自ら貴族の列に加えられたのである。

コストを割って販売しなければならなかった（1880～82, 1900～03）ことによって、繊維マニュファクチュアにいた中産階級の人たちは、富を得ることはなかなか難しく、かつ、長い期間が必要であることがわかった。しかし全体として見れば、かれらはその地位を強めたのである。すなわち、1)シベリアとウクライナにマーケットを拡張し、取引をすることによって、2)機械化によってかれらの利益を可成り延ばすことによって（1914年直前のマニュファクチュアの貸借対照表を見よ、イオクシモビッチの例がある）、3)最後になるが、多くの場合、かれらの仕事に銀行業務を加えることによって、19世紀末および20世紀の始め、ロシアの中産階級は、繊維マニュファクチュアのお蔭で、社会的には西欧流の行動をした。かれらは盛んに土地を買ったのである（1861年までは、何か正常でなかった）。自治体活動に於て、指導的な役割を果たした。かれらの工場が建てられた町や村は、かれらの支配下にあった。政府は経済や関税の問題では、かれらの忠告を受け入れた。しかし、1905年革命の後に於ても、自由主義的なかれらの代表者たちの努力にもかかわらず、かれらはまっとうな政治的役割を演ずることができなかった。かれらは、西欧の中産階級が行った長期にわたる方法を取り得ることなく、1917年の政治変革の中で消滅するのである。貴族階級は国家を掌握し、国家の機構そのものによって、かれらをきびしい政治支配の下においていた。かれらが自由になったばかりであることと、かれらは数的に多くなく、恐慌にもかかわらず富を増し続けていたことを考えるならば、第一次世界大戦前夜の、かれらの制限された政治的野心を説明することができよう。臨時政府期におけるかれらの失敗は、かれらの歴史の線に添ったものである。（山本 敏 訳）